

ブラジルの治安情勢と社会背景

萩原 八郎

The Security Situation in Brazil and its Social Background

Hachiro HAGIWARA

ABSTRACT

The author lived in São Paulo, Brazil, with his family from April 2002 to March 2003. According to information issued by the Japanese Ministry of Foreign Affairs and in local newspaper reports, São Paulo is said to be a very dangerous city. These statements are also supported by statistical data. However, by paying enough attention to personal security, life in the city is not such a nerve-racking experience.

Brazil has a series of socio-economic reasons for its high crime rate, and its security situation can be seen to be getting even worse. The Morals and ethics of the local people are important values that can help prevent people from committing a crime. In recent years, Japan also has been suffering from a rapid loss of public peace, and its crime rate has reached higher levels than ever. From a Brazilian point of view, Japanese people seem to have little experience regarding this issue. Now, Japan should learn from Brazil in order to control the increasing crime rate and recover its public peace.

KEYWORDS : Security, Crime, Brazil, Social inequality, Recent security in Japan

はじめに

筆者は2002年4月から翌年3月までの1年間、日本学術振興会からの派遣でサンパウロに滞在する機会を得た。それ以前ブラジルに4回訪問する機会があったが、今回は初めて家族同伴のブラジル生活を経験したことで、より「生活者」としての視点をもつことができた。渡伯時3歳と4歳の幼児二人がいたため、日常生活において、何よりも心配したのは治安の問題であった。

筆者がはじめてブラジルを訪問した1980年代後半当時から、ブラジルでは自動車の運転が乱暴なので気を付けるように、また治安が良くないので場所と時間によって十分注意するようと言われていた。しかし、もし強盗に遭っても、落ちついて対処すれば命までは取られるようなことはないという精神的余裕もあったように思う。ところが

受理日：平成15年10月10日

最近では長引く経済不況を背景に治安が著しく悪化しており、犯罪もかなり凶悪化している。出稼ぎ帰りや経済的に豊かな現地の日系ブラジル人を標的にした凶悪犯罪事件も日常化している。

この小論では、今日のブラジル、とくにサンパウロの劣悪な治安情勢とその社会背景を概観する。次に、訪伯、また帰国してから感じたことを中心に両国の治安情勢について比較検討してみる。折りしも日本では治安の悪化が叫ばれるようになってきた。治安の悪化に関してブラジルは日本より先進国であり、日本はブラジルに比べて後進国といえる。ブラジルは、遺失物が本人に戻ってくるほど治安の良さを誇る日本から（その正直さを）学ぶべきと言われ続け、日本は優越感をいだいていたかもしれないが、今度は日本が自国の治安を回復させるためにブラジルから（その Know-how や経験を）学ぶ必要が出てきたのである。

ちなみに拙宅でもブラジルに出発する直前に空き巣に入られ、数ヵ月たった時点でも容疑者は見つかっていないという通知を徳島県警から受け取ったとき、未解決のままである。

I ブラジル社会のイメージ

筆者が以前、学生たちにアンケート調査をしてブラジル人やブラジル社会に対するイメージをたずねたところ、「陽気で明るい」、「開放的で楽天的」といった肯定的なイメージがある一方、「政治や経済が不安定」、「貧富の格差が大きい」、「治安が悪い」、「暗い」といった否定的なイメージも認められた。ブラジルに関する情報は、各種の情報源から様々なルートで伝わってくるが、限定的である。徳島新聞のような住民に強い影響力のある一般のマスメディアを通じた情報は、日本から遠く離れたブラジルに関してはその量が少なく、内容もどのような基準で選択されているのか明確とはいえない。たとえば、ブラジルから連想される「カーニバル」の時期には、一般読者受けするようなカーニバル関連記事が写真付きで掲載されたりするが、その内容はとるに足らないものであったりすることがある。このように偏った少量の情報によってブラジルに対するイメージが形成されていくところにやや問題がある（萩原1996）。

2002年のサッカー・ワールドカップ日本・韓国共同大会では、ブラジルが優勝したこともあって、ブラジルに対する関心は大いに高まった。実際、近年Jリーグのチームにはブラジル代表レベルの監督や選手が何人も在籍しており、日本におけるブラジルの存在感は増大してきている。ワールドカップ後にはブラジルでも英雄的存在のジーコが日本代表監督に就任している。しかし、日本在住の日系ブラジル人ジャーナリストのアンジェロ・イシは、今回のワールドカップで日本人のブラジルに対する関心は高まったものの、スタジアムでのブラジル人の派手な衣装やパフォーマンスを見て、ブラジルに対するステレオタイプのイメージや表面的で一面的な理解はかえって強まったので

はないかと懸念している。

さて、今日ではインターネットを通じて、自分が必要な情報を簡単にある程度得ることができるようになった。日本でブラジルの治安に関する情報を得る方法として、外務省海外安全ホームページを検索する方法がある。それによれば2003年6月現在サンパウロには、4段階の警告の一番低いレベルであるが、「十分注意してください」という警告が継続して出されている。具体的な事件を例に挙げながら治安に対する注意を促している内容は、サンパウロがかなり危険な場所であるという印象を与えるものになっている。

II サンパウロの治安情勢

ブラジルの治安を示す一つの指標として、2001年の人口10万人あたりの殺人件数（発生率）を見ると世界第4位で、発生件数（絶対数）では年間3万件以上で殺人の最多発国になっている。これをサンパウロ州と州都サンパウロ市について見てみると、殺人発生件数はサンパウロ州12,475人、サンパウロ市5,174人となっており、ブラジル全体に占めるサンパウロ州の割合、およびサンパウロ州に占めるサンパウロ市の割合が人口比より高く、農村部に比べてサンパウロ市およびその周辺部の都市地域での治安が悪いことを示している。人口10万人あたりの未決囚と既決囚を合わせた収監者はブラジル全国平均で138人であるが、サンパウロ州は265人で全国平均の約2倍の指数になっている。絶対数でも全国総収監者235,084人のうちの42%がサンパウロ州に集中している。しかも州内には逮捕令状を発せられたまま逮捕に至っていない者が10万人もいるという（2002年4月2日付サンパウロ新聞）。

また、2002年7月6日付ニッケイ新聞（サンパウロ新聞と並ぶ日本語新聞）は、サンパウロ州保安局の統計データから、サンパウロ市では5分に1台の割合で、車両強奪・窃盗事件が発生している、と報じている。サンパウロ大都市圏では、3分20秒に1台となる。大手テレビ局グローボの

ニュースによると、強奪または窃盗された車両の20～30%は、未認可が大多数の車両解体場行きとなっている。

2002年11月にはサンパウロの治安の悪化を象徴するような事件が起きた。都心部に近いリベルダーデ地区のコンデ・デ・サルゼーダス街と、それに交差するオスカル・シントラ・ゴルジンニョ街一帯で11月7日朝から商店は全て閉鎖したままという異常な事態になった。これは、“toque de recolher”(本来は「消灯の鐘」の意=転じて喪服閉店令)と呼ばれるもので、発端は前日の午後、通報を受けた軍警察隊が、同地区のオスカル・シントラ・ゴルジンニョ街で麻薬密売人とおぼしきグループと撃ち合いになり、密売容疑者2人が射殺され、5人が逮捕された事件にある。コンデ街で食料品卸業を営む日系人の話では、その事件当日の夜、軍警との銃撃戦で死んだ麻薬密売人の仲間が、各商店に翌朝は喪に服し、店を閉めるよう命令を触れ回ったそうである。この日系人は、その前に店を閉めて帰宅しており、翌朝いつもどおり店を開けようとしたとき、前夜その命令を聞いた隣の人からの情報に従って、急きょ店を開けないことにしたという。この現象はリオデジャネイロ市ではしばしば起き、サンパウロ市郊外でもすでに起きていたが、このようにサンパウロ市中心部では初めてのことであった。120人の軍警官による特別体制で現場の安全を保護しようとしたが、商店主たちは誰も店を開けようとしなかった。

2002年12月6日付ニッケイ新聞は、FGV(ジェトゥリオ・ヴァルガス財団)が11月13～17日、州都9都市ほか92都市を対象に行った「治安に対する恐怖度ランキング」調査で、サンパウロ市が、バイア州都サルヴァドール、リオグランデ・ド・スール州都ポルト・アレグレと並んでトップとなった、と報じている。恐怖度は犯罪件数と比例して増加するとは限らないが、サンパウロ市の場合には過去7年間に急増した犯罪のせいで恐怖心が膨らんでいったのではないかと見られている。サンパウロ州民の64%が「常に犯罪に脅えている」と回答。93%が「犯罪が増加した」と答え、26%

は「見知らぬ場所では犯罪に遭いやすい」と考えている。州内で最も恐れられている犯罪は、1位が拳銃を持った強盗(51%)、2位がバッグなどを切るスリ(41%)、3位が強盗殺人(40%)、4位がバス強盗(38%)となっている。犯罪がまん延していると言われるリオデジャネイロ市がサンパウロ市より低く4位となったことについては、リオ市民の恐怖に対する「マヒ現象」で説明でき、数十年前から犯罪がはびこるリオ市で、「自動的」に生き残っていくことが、市民の間で習慣化したためだという。

Ⅲ 治安問題の社会的背景

世界最悪級のブラジルの治安状況はさらに悪化しているようにさえ見えるが、その社会的背景としてまず挙げられるのが、近年の景気低迷と経済的不安であり、社会格差の拡大と貧困層の存続は植民地時代から引き継いでいる歴史的課題でもある。

ブラジルでは1980年代後半から加速するインフレーションを沈静化させるためにショック政策を数度にわたって実施したが、いずれも早晩破綻し、次に繰り出す通貨政策に対する信用を低下させてきた。しかしその経験を踏まえて1994年に始まった構造的な通貨政策とも言えるリアル計画によってそれまでのハイパー・インフレを収束させることに成功し、今日までインフレ抑制に成功している。経済が安定化したことによって安心して耐久消費財などを分割払いで購入することが可能になり、消費ブームを見たが、貧困層の底上げは非常に限定的であったために貧富の格差はむしろ拡大してしまった。最近の物価の安定も大衆の購買力が低く需要が低迷しているために価格を上げられない側面が強い。このような長期に及んでいる経済不況が治安の悪化の背景になっていることは明らかである(萩原1999)。

社会の低層を構成している人たちの多くは、社会の輪の周縁部(マージナル)に追いやられた人たちであり、いわゆるインフォーマル・セクター

に属している。地下経済とも言われるインフォーマル経済で生活の糧を得ている人たちは、ごく一部を除けば不安定で低い収入に苦悩している。道端で店を広げている「camelô : カメロー」と呼ばれる露天商の大部分は、市の認可を受けておらず、都心部の問屋街などでは、通行の妨げになるという理由でしばしば警察の摘発を受けて撤去させられている。しかし、通り過ぎればまたすぐに元に戻ることを繰り返している。これは、物を売らなければ収入が得られない彼らにしてみれば当然のことなのである。

歩道に座りこんだ物乞いは、受身の姿勢でお金を「乞う」行為をしている。しかしある晩、人通りが少なくなってから筆者が物乞いの前を通ったときには、「お金」に続いて履いている「靴」をくれないかと声をかけられたことがある。けっして「強要」するものではなかったが、この一瞬の経験を通じて、普段は穏やかな物乞いが状況によって恐喝におよんだとしても不思議はないという気がした。貧困などの社会背景は犯罪行為を正当化できるものではないが、貧困問題の存在する社会は、犯罪の起こりやすい状態にあるといえよう。

その他、治安情勢が劣悪になっている要因として以下のようなことが考えられる。

- ①銃器類の不十分な管理体制
- ②麻薬使用の低年齢化と青少年の麻薬に絡む犯罪：麻薬中毒者は麻薬欲しさに犯罪も
- ③警察の取締り能力と刑務所の収容能力の限界をはるかに超えている現状
- ④死刑制度の不在と不完全な刑罰の適用
- ⑤組織犯罪と脅しの構造
- ⑥警察の汚職と犯罪への加担

上記のような様々な犯罪の要因が社会背景にあるため、複雑な問題であり、治安の回復の方向性はなかなか見えてこない。たとえば2002年4月にサンパウロ市内東部で起きた女性校長殺害事件は、麻薬取引が行われていた学校から麻薬を排除しようと正義感をもって組織犯罪に立ち向かった女性校長が暗殺されたものであったが、マフィアのよ

うな構造的な悪は根の深い問題である。

また、犯罪発生を助長するような要因という意味で、普段からスキのある状況をつくらないようにする意識が大切である。たとえば多額のお金を扱う銀行では、必ず入り口付近に拳銃をもったガードマンが控えている。窓口には「この支店の金庫は電子制御になっており、決められた時刻にのみ開きます」といったメッセージが明記されており、銀行員を脅しても金庫を開けることが出来ない旨あらかじめ周知することによって防犯に努めている。そして、人目のない場所、安全でない場所にはなるべく近づかないほうがよいということになる。その結果、大都市サンパウロの大きな魅力であるナイト・ライフを楽しむにもつねに治安の心配をしなければならないのは残念である。防犯対策にかかる社会コストも膨大であり、何よりもストレスにつながる点で健全な社会ではない。

犯罪の主体としてのブラジル人について考えてみると、“aproveitar”（「利用する」の意）という文化的特徴も犯罪発生に深く関係しているように思える。良い意味では、チャンスをうまく「利用する」ということであり、好機があれば「ついでに」それを利用することは効率的であるし、そのような形式にとらわれない軽いノリはブラジル人の長所である。けれども悪い意味では、付け入るスキがあればそれを利用しない手はないというやや「ずる賢い」面が顔をのぞく。出来心は人間だれしも持つであろうが、それを罰則など外的作用に依存せず、自分の意志で抑制できるかどうかは、個人の教育レベルと倫理観に依拠しているように思われる。その倫理観を育てるためにも学校教育がきちんと実施されることが重要である。

IV 日本の治安問題

図1は刑法犯認知件数（絶対数）を、図2は戦後について刑法犯犯罪率（人口10万人あたりの発生数）を示している。戦後の犯罪数は1970年代まではやや減少し続け、犯罪率でいえば相当の減少傾向を示しており、これによって「日本は治安の



図1 刑法犯認知件数の推移

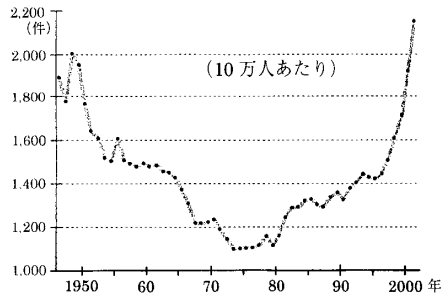


図2 戦後全刑法犯犯罪率の推移 (10万人あたり)

注意：図1，2とも交通業務上過失を除く
 出典：『日本の治安は再生できるか』ちくま新書

よい国」というイメージが形成されてきたが、1980年代以降増加に転じ、とくにここ数年の急激な増加によって絶対数でも犯罪率でもかつてない治安の悪化を示すに至っている。

2003年10月4，5日の2日間にわたってテレビで放映されたNHKスペシャル『治安はとりもどせるか』では、最近の犯罪の増加と凶悪化が指摘され、「なぜ日本の治安は悪化したのか。どうしたら安全な暮らしをとりもどせるか」がテーマとして取り上げられた。この年発生した福岡での一家4人殺害事件と長崎での幼児殺害事件が例に出され、前者の事件では中国人グループによって一家4人が殺害され海に投げ込まれ、後者の事件では、中学生が4歳の男児をビルの屋上から突き落としている。これらの事件は外国人犯罪の増加と犯罪の低年齢化現象も同時に反映している。

このテレビ番組の中で、今日治安の悪化は、い

つ事件に遭うかわからないほどであり、それは大都市ばかりでなく、地方都市も例外ではないと指摘されている。約10年前の平成5年から平成14年にかけて都道府県単位で犯罪数の増加率が2倍以上であるところが青森、岐阜、三重、奈良、兵庫、香川、佐賀、沖縄といずれも地方であり、しかも中京、近畿、北九州の大都市周辺に目立って分布している。その間犯罪の数が多い東京都で2割未満、大阪府で2～3割の増加率にとどまっている。

外国人による犯罪の増加については、盗品の流通ルートなどに犯罪のネットワークが形成されており、大都市の外国人が多いため滞りやすい地区に不法滞在の外国人などがしばらく滞在すればそのうちに犯罪に手を染めるようになるという現場の人間の証言がインタビューで紹介された。このような状況が広まっていることを裏付けるかのように、本学卒業後東京で勤務している合気道有段者のA君は、最近東京の繁華街で外国人に些細なことで因縁をつけられることが増えたと2003年9月本学訪問時に述べている。

犯罪に対して防犯対策を取っても次々にエスカレートして新しい手口が考え出されていく構造はブラジルでも日本でも状況は似ており、日本で空き巣ねらいは、当初の鍵をこじ開けるピッキング犯罪が減少してきたが、ドリルでドアに穴を開けて内側の鍵を回すサムターン回しやガスバーナーでガラスを割る焼き破りが増加している。犯罪も空き巣ねらいの窃盗から家に人がいてもかまわずに押し入る強盗へと凶悪化の傾向が見られる。この徳島においても、空き巣ねらいなど犯罪が増え、それは明石海峡大橋の開通で関西と陸続きになったことにも関係があると言われている。夜間の戸締まりは、都会では常識になっているが、かつては入り口に鍵をしなくても心配なかったという農村地方もそうはいかなくなってきた。

2003年は冷夏となり、生産不良から新米の価格が高くなったこともあり、収穫済みの米俵が倉庫から盗まれる事件が発生した。10月に入って滋賀県で収穫直前の田んぼ2,000m²の4分の3が刈り取られるという前代未聞の窃盗事件も発生した。

これまでになかった事件ということでは、やはり10月に日本人旅行者が中国旅行中に誘拐され、日本の家族が国際電話で身代金(510万円)を中国まで持ってくるよう要求されるという、国際的な規模の事件も発生した。この事件の容疑者は逮捕され、被害者は無事に保護されたが、犯罪は増加、凶悪化とともに多様化も示している。

V ブラジルから見た日本

かつてサンパウロのリベルダーデ地区に日系のニテロイ映画館があり、そこで日本映画『野菊の墓』を観たことがある。身分の違う二人の許されない悲恋がテーマであったが、日本から遠く離れたブラジルで時間も空間も異なる社会の話に大いに違和感を覚えたものである。というのも、ブラジルでは人前でキスをするのも普通という開放感があり、恋愛相手を選ぶのも基本的に本人たちの自由である。その映画で描かれていた昔の日本の規制の多かった恋愛事情とはあまりに対照的であったからである。

今回ブラジルに着いてからまもなくして、北海道の女性獣医が狂牛病にかかっていた牛を検査で見抜けなかったことを苦にして自殺した事件が伝わってきた。その後狂牛病とわかったので、すぐに対処して大事には至らなかったわけであるし、その女性検査官に過失があるとも思えなかったが、「責任感の強さ」から思いつめて自殺にまで至ったというショッキングな出来事であった。ブラジルでは、会った際の挨拶にも使われる言葉で“tudo bem”(「すべてOK」の意)という表現がある。これは、相手の失敗に対しては「かまわない」という許容の心遣いにもなり、ブラジルでよく使われるブラジルらしい表現である。狂牛病を見抜けなかったとしても、その経験を今後を活かせば“tudo bem”だったはずである。

2003年4月にブラジルから日本に戻ってからもまもなくして、小さな子供を車の中に置いたまま母親がパチンコに興じ、その間に子供が熱中症状になり死亡したという事件が報じられた。「またか」

と思わせる親の不注意から起きた事故であったが、このニュースを聞いた瞬間に、ブラジルでは起こりえない事件だと思った。そう思った理由は何か、ある講義中に受講生たちに次の三つから選択してもらった。

- ①ブラジルにはパチンコ店がないから、このような事故は起こらない。
- ②ブラジル人は注意深く日陰に駐車するから、事故には至らない。
- ③誘拐のおそれがあるから、手元から離れた場所に幼児を長時間放置することなどありえない。

ある学生に答えをきいてみると、①との回答だった。後日、日本在住の日系ブラジル人に同じことをきいてみると、はたして回答は③であった。①という答えは、たしかにブラジルにはパチンコ店がないので、正解と考えるかもしれないし、②もそう間違っていないかもしれない。しかしブラジルの犯罪事情を肌で知っている者にとっては、迷わず③という答えが出てくるのである。

夏の夜間のことであるが、徳島市郊外の公共文化施設の敷地に自動車に入った時に、暗く人気のない駐車場に若い男女のカップルを見かけた。周りに誰もいないところに無防備でいるということは、ブラジル感覚が残っていた筆者には犯罪を誘発するような雰囲気を感じた。けれども本人たちはおそらくそのような危険を感じないからそこにいたのであろう。

バブル経済崩壊後、不況を背景に中年の自殺者が増えたという報道を耳にしてから久しくなってきたが、最近ではインターネットで知り合ったもの同士の集団自殺が新しい社会現象として報道されるようになった。けれどもさらに驚いたことは、日本の自殺者は年間3万人以上いて、1日平均で100人前後の人が自殺しているのであれば、報道される事例のほかに多くの自殺が起きているということである。3万人以上といえば、世界で最も多いというブラジル殺人事件の被害者に相当する数字である。

ブラジルでは、誘拐殺人事件がしばしば報道さ

れるが、日本でもブラジルのお株を奪うような凶悪殺人事件が静岡県で起きた。誘拐した相手を殺害してしまう荒っぽい手口は外国人による犯行かとも思わせたが、容疑者は被害者と同僚の日本人であった。

さいごに

日本とブラジルは、地球上の位置関係から様々な生活習慣まで対照的である。均質性の高い日本の社会と多様な移民たちのブラジル社会とは、経済情勢や治安の面も対照的であった。日本は治安のよさを誇り、ブラジルはその逆であったが、近年両国で犯罪発生状況が悪化している。現在の日本は、治安情勢が急激に悪化しつつあり、どのように治安を回復するのかは生易しい問題ではなさそうであるが、犯罪面での先進地であるブラジルの状況は、示唆的であり、反面教師として参考になりそうである。

日本で得られるサンパウロの治安情報からは、サンパウロは相当危険な都市という印象を与える。実際に住んでいる人の話を聞いても、危険であることを強調する人もいれば、それほど危険ではないという人もいる。筆者の経験では、現地に着いてしばらくは相当緊張するが、すこしずつ緊張感がとれてからも気を緩めることなく注意をしてリスクを避けるような行動をとってれば、必要以上に恐れることはないことがわかってくる。事実、サンパウロでは危ないと言われるパウリスタ通り界隈に1年間無事快適に過ごすことができた。サンパウロからリオデジャネイロに行ったときも、サンパウロで事前に聞いたリオの治安情勢は最悪であったが、現地の人に話を聞いてみると、危ないところを注意するのは昔から同じとのことであった。

マットグロッソ州都のクイアバに住む知人は、数年前治安のよさからクイアバに住むことにしたが、今では犯罪発生の多い都市となってしまった。住民にとって治安はよいに越したことはないが、悪くてもそれなりにつきあっていかなければなら

ない。犯罪に対する自己防衛能力が本能的に身につけているブラジル人と比べると、今の日本にはまだ緊張感が不足しているようである。犯罪に対する緊張感は、リスクのある社会に生活するうえで真剣に生きるということにも通じるように思える。多民族国家のブラジルにおいては、いろいろな価値観をもった他者との共存をベースにして、長引く経済不況、解消しない貧富の格差、劣悪な治安情勢といった困難な状況の中で人々は明るく親切で思いやりに溢れている。その点で日本は見習うべき面があるのではないだろうか。

この小論は、2003年6月24日経営情報研究所月例研究会で口頭発表した「ブラジルの社会情勢と報道される事件」に加筆修正したものである。

謝 辞

今回のサンパウロ派遣に関しては、日本学術振興会国際情報課の関係者に、また1年間に及んだ長期出張については、四国大学関係者に大変お世話になりました。この場を借りて心より感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 萩原八郎 (1996) : 地方新聞紙上にみられる地域別外国報道量について—徳島を例として— 四国大学経営情報研究所年報, No. 1, pp. 79~85.
- 2) 萩原八郎 (1999) : 1990年代のブラジル経済動向—レアル計画を中心に—, 四国大学経営情報研究所年報, No. 5, pp. 119~132.
- 3) アンジェロ・イシ (2001) : 『ブラジルを知るための55章』, 明石書店, 265P.
- 4) 前田雅英 (2003) : 『日本の治安は再生できるか』, ちくま新書, 206P.
- 5) 外務省海外安全ホームページ (<http://www.pubanzen.mofa.go.jp>)
- 6) ニッケイ新聞ホームページ (<http://www.nikkeishimbun.com.br>)
- 7) サンパウロ新聞ホームページ (<http://www.spsimbun.com.br>)

(萩原八郎：四国大学 地理学研究室)